

故人との区切りをつける

悪質業者によるトラブル多発 遺品整理に必要な3つの準備

一筋縄ではない作業を、円滑に進めるための要点を押さえよう。

ジャーナリスト ● 村田くみ



業者に頼む際には見積書を必ず受け取り、費用や項目など内容を細かくチェックしよう

家 族が亡くなった後、遺族を待ち受けているのが遺品整理だ。最近では業者に依頼する人も多いが、「作業時に予定外の料金を請求された」「処分しないように頼んだものを勝手に捨てられた」といった悪質なトラブルが増え、全国の消費生活センターなどに相談が相次いでいる。

「業者を選ぶ際に金額の安さだけでなく、目がいってしまおう。だが内容をよく確認しないで契約してしまうと、トラブルにつながりやすい」

日本初の遺品整理会社として2002年に創業し、年間18000の案件を扱うキーパーズの吉田太一社長はそう話す。

トラブルを回避するためには、依頼する前に見積書を作成してもらうことだ。費用の目安は1部屋当たり10万～15万円程度、2Kの

マンションの場合は、総額で30万円ほどになる。片づけるモノが多くて分別に時間がかかる、原状回復をして掃除まで行う、など作業の範囲や負担が大きくなるほど、費用はかさむ。

見積書の内訳には、必ず目を通すようにしよう。「一般廃棄物処理業者へ支払う費用」、「作業員の人件費」、「家電リサイクル料金と収集運搬料金」、「清掃費用」など、作業内容やそれにかかる費用を明確にしているかによって、業者の信頼性が見えてくる。

「見積書は複写式で控えが依頼者の手元にも残るものか、打ち合わせ中に強引に契約を迫ってこないか、など判断する要素はたくさんある。見積もりを取った担当者が現場作業の日まで責任を持って担当してくれるのかも重要。打ち合わせをして担当者と話すれば、

会社の姿勢は伝わる」（吉田社長）追加料金やキャンセル料、具体的な作業内容についても、事前に確認しておこう。見積書の内容や業者の対応が気に入らないなら、契約しないことだ。業者を慌てて決めると、トラブルの原因になりかねない。

自分で進めるなら 時間の余裕が必要

遺族自らが整理する場合は、ある程度の時間が必要になると考えておいたほうがいい。

ゴミ出し一つをとっても、自治体のルールに従って分別したり、収集日に合わせて出さないといけなかったりする。兄弟や姉妹など身内で整理すると、思い出の品を見つけるたびに話し込んでしまいがちで、作業がはかどらないこともある。

都内に住む40代の女性は、同居する父が他界した後、すぐに母が老人ホームに入居した。そこで住んでいた3LDKのマンションは引き払い、駅の近くにあるワンルームマンションに引っ越すことにした。遺品整理と部屋の片づけを1人で行ったのだが、「仕事から帰ってきた後の、夜の時間帯に少しずつ片づけていったので、1カ月ほどかかった」（女性）。

両親の洋服や靴などは可燃ゴミとして一気に捨てた。父の趣味だった釣りの道具は、父の友人たちに形見分けとして引き取ってもらった。家の中に飾ってあったトロフィーやレジャーの品物はすべて自治体の粗大ゴミに出した。布団や食器、キッチン用品などまだ使えるモノのほとんどは親族が引き取ってくれた。

遺品整理はそれだけでは終わらない。1人で処理するのに苦労したのが家具だ。すべて自治体の粗大ゴミとして処分したが、ゴミ捨て場まで運ばなければならぬ。結局、自力では難しく、引っ越しの当日、業者をお願いして運んでもらった。

ほかにも処理に困ったものがある。押入れの天袋にしまい込んであった雛人形だ。供養してくれる神社を探して郵送し、おたき上げしてもらった。

自治体への粗大ゴミ料金の支払いなど、遺品整理に関する費用は約4万円で済んだが、時間がかかったうえに精神的、体力的な負担は大きかった。

遺品整理を通じて 故人の思いを知る

遺品整理をスムーズに進めるためには、故人の生前から遺品整理

のことを想定しておくのがお勧めだ。3つの準備（心の準備）「状況の把握」「具体的な準備」をしておくだけでも、実際に遺品整理をする状況に直面したときに慌てることが少なくなる。

ほかにもお金に関することは、遺族間で事前に話し合っておきたい。遺品整理をしていると、故人の部屋の意外な場所から貴重品が

「遺品の整理はその過程で故人の生き様や意外な一面を発見することが

心の準備

- なぜ自らの手で遺品整理をしようと思うのか
- 故人はどんなふうに遺品整理をしてほしいか
- 故人に対してどんな気持ちで行うのか
- 形見としてどんなものを中心に引き取るか
- 今、片づけて区切りをつけることに後悔はないか

状況の把握

- 部屋の鍵は誰が持っているか
- 部屋の賃貸借契約書はどこにあるか
- 近所にいつあいさつをする予定か
- 整理を始めてほかの親族が納得するか（亡くなって日が浅い場合）
- 相続人は誰か
- 家賃や光熱費などの滞納はないか
- 借金はないか
- 遺品整理をすることを、どの範囲の人までに知らせるか（身内以外でも故人の親友などには事前に話しておくとうい）

具体的な準備

- 誰に手伝ってもらうのか。メンバーは何人いるか
- いつ行うか、いつまでに完了する予定か（工程表を作成）
- 不用品を業者に引き取ってもらう手配はできているか。自分で処分場に運ぶ場合、車の手配はできているか
- 段ボール箱、ゴミ袋、テープ、軍手などの手配は大丈夫か

（出所）吉田太一著「遺品整理」で困らないために知っておきたいこと（PHP研究所）を基に本誌作成

お金を使わず、弟のためになるように生命保険に加入していたことを、片づけを通じて知ったからだ。遺品整理は遺族が前を向いて生きていくため、区切りをつける役割もある。「整理が完了すると、故人は人生をしまおうことができ、遺族の記憶の中の存在となる」と吉田社長は言う。

遺品整理は労力がかかり、一筋縄ではないかもしれないことも多い。ただ、自分で行うにしても業者に依頼するにしても、心にしこりを残さないように進めたい。